

## 第2話 恩師との再会



広島県に「放送アカデミー」という組織ができ、2年ほどまえに講演をたのまれた。この組織はテレビ番組を利用してべんきょうしている社会人のグループである。出張の依頼を受けたときまっさきに思ったのは、「今石先生にお会いできる」ということであった。先生は広島女学院大学英文科主任教授としてつとめておられることを知っていたからである。

広島市での講演会が終わったあと、私はホテル・ニュー・ヒロシマの自分のへやに先生をお迎えした。と言っても、私が会場からホテルにもどったときにはすでに先生はお着きになっていて、へやのドアをあけたとき目にはいったのは、イスにかけておられる先生の後姿であった。先生のお姿は意外に小さく感じられた。私が先生に対して抱き

つづけてきたイメージは、中学生のときのままであったからかもしれない。

「やあ、おかえり」と言って先生がイスからお立ちになり、私は先生にだまって最敬礼した。私は感動で胸がつまり、モノが言えなかった。

「きみもげんきでりっぱな仕事をしていてくれてうれしいと思いますよ。村松くんからも時々たよりをもらいます。あのころの生徒たちが、みんなそれぞれの分野でがんばってくれているので…」

と先生は目をしばたきながらおっしゃった。村松くんというのは、「アポロ打ち上げ」のときに一躍有名になった同時通訳の会社サイマル・インターナショナルで専務取締役をやっている。

さて、今石先生とお話している最中に、フロントから電話がかかってきた。私に面会したいと女子高校生がロビーでねばっているが…というのである。無視するわけにもいかないで、私は先生におことわりしてロビーにおりた。

ロビーの片隅に、セーラー服を着た女の子がひとりチョココンとすわっていた。そして彼女は泣いていた。

「ぼくタザキです。でも、どうしたの？」

彼女は私の顔をマジマジと見た。大きな目から大粒の涙がポタポタ流れ落ちた。泣きじゃくりながらの話を総合すると、こんなことであった。彼女は広島市郊外のある高校生成で、広島アカデミーでの講演を聴講させてもらおうとまえからきめていたのだそうである。ところがあいにくその日に試験があり、早退できなくなってしまった。そこで、N

HKの広島放送局の係の人から滞在しているホテルの名まえをきき出し、私を訪ねて来た。彼女は進学とすきな英語のべんきょうの「板ばさみ」になっており、ぜひ私の意見がききたかったのだそうである。

「それなのに…」

と彼女はすすりあげた。

「ホテルの人は、『センセイは高校生にはお会いにならない』と言ってとりついでくれないんです。私がせっかくいっしょうけんめいやって来たのに…。センセイにお会いするのがそんなにむずかしいなんて知りませんでした…」

私はフロントの人が、私の旧師との再会にこの高校生を割りこませぬよう配慮したのだな、と感じた。

「それは悪かったね。ゴメン。じつはボクの中学のときの恩師が訪ねてくださっているのです、ボクがフロントの人にだれも取りつがないようにたのんでおいたんです。カンベンしてください」

私は彼女とコーラを飲みながらロビーで話した。10分ほどの短い時間だったが、彼女はよく話した。帰るころには、すっかりきげんを直し、ニコニコしながら手を振って帰って行った。

再びへやにもどって今石先生に失礼をわびると、先生は、

「ボクは時間がたくさんあるからいいんだよ」

とおっしゃった。私は、こんどお目にかかる時は私も時間をたくさんとれるようになりたいものだ、と思った。

## 会話がうまくならないタイプ

「いくら練習をしても会話が上達しませんが、どうしてなのでしょうか」という質問をよく受けます。私は医者ではありませんから、診察し診断し治療をするなどともできません。がその人たちの話を聞いていると、共通している何かがあることを感じます。

第1に、「ものを考えるタイプの人」はどうも上達が遅いようです。英語をまるのまま記憶し再現をする作業の途中に「思考」が割りこんでくるのです。What is it that you are looking for? という文を聞くと、この that は関係代名詞であるとか、とすれば that のかわりに which をつかうことができるだろうかとか、もっとひどい場合には What are you looking for? との構造上のちがいは? などと「分析的作業」をはじめてしまいます。私たちは日常生活で英語をほとんどつかっていないので、英語を耳にすれば多少なりとも分析的になる傾向があるのは当然かもしれません。でもいきすぎでは「生きた英語」の修得に大きな障害になります。

第2に、「英語のわかる人」は上達が遅いようです。英語がわかる人はすぐ「ああわかった」と思いこんで、それが血となり肉となるまでの練習をしない傾向があります。「わかること」と「つかえること」とはちがいます。

第3に、暗記の量が少ないか、あるいは全然暗記をしない人がいます。暗記をしなくてもわかっているのだから、という妙な自己満足感が会話力の獲得を妨害しています。

第4に、疑心暗鬼的なタイプが多いことです。何事でもマスターするまでには長時間が必要です。それなのに、少しやってみては「どうもうまいかない」とすぐ方法をかえてしまい、常に「もっとよい方法」ばかりを捜しまわっています。

いかがですか。あなた自身をよく考えてみてください。